

シンポジウム：日本現代化の歷程、経験及び教訓 ——経過報告および総括

劉 岳兵

去る2011年4月2日に、南開大学日本研究院、「教育部人文科学研究拠点」に指定された南開大学世界近現代史研究センター合同のシンポジウム“日本現代化の歷程、経験及び教訓”が開催された。中国社会科学院、北京大学、北京外国語大学、中国政法大学、首都師範大学、山西大学、中南民族大学、南開大学、天津社会科学院、天津市社会科学連合会、天津師範大学、天津外国語大学の学者及び世界知識出版社、『世界歴史』『国外社会科学』『読書』『日本学刊』『南開学報』などの出版界、学術誌の責任者のほか、《日本現代化の歷程研究叢書》の作者ら60余名が参加した。シンポジウムでは、2010年12月に世界知識出版社から出版された《日本現代化の歷程研究叢書》10巻に対する講評及び最近の東日本大震災、原発事故にも言及しつつ、日本現代化の歷程、経験及び教訓というテーマに関して、活発な議論が行われた。

本叢書の主編者である楊棟梁教授は基調報告の中で、「現代化」という概念に対する新見解とそれを本叢書に浸透させようとする努力について述べた。楊教授によると、「現代」とは我々が生きている時代のことで、「当代」と基本的に同概念である。「現代化」(Modernization)は起点、範疇、内容、性質などあらゆる面で、「近代化」の内容と重なり、その延長線上に位置しているが、「資本主義化」の思惟パターンには縛られていない。現代化とは、人類が近代以来の封建的生産方式と伝統思想を捨て、より良い物質文明と精神文明、制度の改善を追求する過程そのものである。この過程は資本主義の工業文明や文明政治、制度の改善を絶えず最高峰に推しあげていくと同時に、非資本主義的なもの、いわゆる人類社会をハイレベルな段階へリードする新要素を孕み、創り出している。したがって、現代化は「近代化」の延長・継続であり、近代化を基にする発展と超越でもある。この意味から言えば、近代化、或いは伝統的な意味での資本主義化は、現代化の主な内容となるが、その全てを包括することはできない。故に、もっと広い意味での現代化の枠に収めるしかない。

この視点から見れば、楊教授が強調したように、人類が現代化に邁進するプロセスとして、①イギリス、フランス、オランダをはじめとする原生型モデル ②ドイツ、ロシア、日本をはじめとする発展型モデル ③インドなどの植民地国の依存型モデル ④ソ連、中国の超越型モデルが形成された。この四つのモデルが現代化される過程において、前述の新要素を生み出す

可能性がないとは言えない。世界各国の現代化モデルの中では、日本が最も研究に値する対象である。というのは、近代以降、アジアにおいて日本が唯一近代化を実現した国であり、当代においても現代化の完成度が最も高い国であるからだ。日本よりかなり立ち遅れた中国にとって、日本の経験は価値あるものである。近代史上、日本は中国に多大な損害と苦痛を与えた国であり、中国がこの「永遠の隣人」と付き合いしていくには、日本の民族性や日本社会の特性を把握し、「己を知り相手を知る」、「故きを温ねて新しきを知る」必要がある。そうすることにより、現代化を推進していく過程で、適切に対日関係を処理できるようになるだろう。日本は世界のトップレベルに迅速に追いつき、追い越した国であり、現代化されつつある中国にとって、その長所を生かし、短所を避け、日本の現代化過程における経験と教訓を汲み取ることは非常に重要である。

楊教授は以上の観点を本叢書の序言である「日本現代化研究の視角と課題」で詳細に論じた。この観点は日本研究の先学である天津社会科学院の呂万和先生の賛同を得た。呂先生は固定概念や束縛を振り切ることは歴史研究者がとるべき姿勢であり、そうしてこそ研究の膠着状態を打開することができるかと主張した。

世界知識出版社は、「《日本現代化の歷程研究叢書》は世界の学界において、初めて系統的に明治以来の日本現代化の歷程を研究し、整体性・系統性・学術性を兼ね備えたものであり、我が国学界の最新の研究成果を開示した」と本叢書を高く評価した。南開大学教務長の朱光磊教授は、本学の日本研究の伝統を振り返り、日本研究は本学の国際問題研究の重要な課題の一つであり、楊棟梁教授ら研究者が十年を費やして完成した本叢書は、吳廷璆先生が編集した百万字を超える『日本史』に次ぐもう一つの重大な研究成果であると語った。中国社会科学院日本研究所所長の李薇教授は、「本叢書は中国の日本研究においてかつてなかったプロジェクトであり、統一された構想のもとに各巻はそれぞれの特色をもち、実り多い成果を上げたのみならず、今後の叢書編集、とりわけ日本研究叢書の編集にマクロ的な視野と経験を提供した」と述べた。同所の副所長である高洪教授は、「力作揃いの10巻の大型叢書は中国における日本研究に彩りを添え、中国と日本、ひいては世界各国の日本研究者にも斬新な視点を提供した」と語った。北京大学歴史学部の宋成有教授は、日本近現代史学の角度から分析し、本叢書の出版が我が国の日本近現代史の研究を全体的に推し進めたと強調した。天津外国語大学学長の修剛教授、天津師範大学歴史学部部長の候建新教授、南開大学歴史学部部長の陳志強教授は、本叢書の出版は学界の一大事であり、その研究成果は正に里程標と言っても過言ではないと述べた。更に、中華日本哲学会会長、中国社会科学院の卞崇道教授は即興で「十年一劒を磨き、十巻の叢書が実る。蛍雪十年苦多し日々、永遠にその名が残る」と吟じた。

日本法政大学国際日本学研究所の王敏教授は世界における日本研究の新動向を紹介し、ハーバード大学の傅高義教授が国の継続発展のために日本研究をする目的性を中心に考察した。王教

授によれば、《日本現代化の歷程研究叢書》は中国学界の最高レベルであるだけでなく、世界の研究水準にも達し、世界範囲での種々多様な日本研究に対する関心に応えたと述べた。例えば、非西洋の価値体系の視点とは果たしてどういうものなのか、またその視点をいかに体系化・理論化するかという面で、本叢書は有益な模索をし、問題提起をした点に高い学術的価値があるとした。

さらにシンポジウムでは、以上の発言と合わせて各関連分野の権威者からの貴重な意見が述べられた。

天津社会科学院の呂万和先生は米慶余教授の「日本近現代外交史」について、同書は戦前戦後を貫く日本外交通史であり、体裁が整っており、要綱が簡明で、重大事件や文書、史料などの全てにその出典をページ、コードナンバーまで明記しており、その学識のほどを窺い知ることができる。また史料の豊富さに加え、特に当事者の回想録を重視し、伝記及び日本国内の文献を利用して歴史の真相を明らかにしたことで、一層の説得力を持つに至ったとし、同書は著者の長年の研究成果の結晶であると高く評価した。

天津社会科学院日本研究所の高洪副所長は、王振鎖教授、徐万勝教授の共著である「日本近現代政治」は学術の空白を埋め、新基軸を打ち出したと講評した。日本政治分野における歴史著書は今まで我が国では見られず、同書は激動の日本近現代政治史を系統的に整理し、幕末維新から21世紀初期にかけての政治発展の背景・原因・過程・結果をまとめ、研究者のみならず、日本に関心を持つ一般読者にも向いていると高副所長は語った。

中国政法大学の金仁淑教授は、楊棟梁教授の「日本近現代経済史」は日本経済史学の重要な研究成果であり、実証考察を経済学的分析に結びつけ、全面的且つ系統的に明治維新以降の日本の現代化の歴史及びその特色を多角的に論じていると述べた。また、国内外における日本経済の二つの成功（明治維新以後に資本主義の軌道に乗った点、第二次世界大戦後にアメリカに次ぐ先進国になった点）と二つの失敗（敗戦と20世紀90年代以降の経済不況）に関する研究は、斬新な構想と基礎理論を提供するとともに、我が国経済の現代化の建設における政府と市場、自由と制限、効率と公平、発展と平衡という二極関係論を深め、きわめて大きな現実的意義と長期にわたる指導的意義を持つものであると高く評価した。

中国社会科学院日本研究所の崔世広教授は趙徳宇教授の「日本近現代文化史」について、同書は日本近現代文化史から日本の現代化を透視し、続いて文化の発展の特徴を把握しようとするものであり、その特徴は、取り入れ主義の実用性、伝統文化の安定性、多元文化の並存性にあり、これが客観的に日本文化と西洋文化を、また日本の伝統と現代との関係を理解するのに啓示的意義を持っていると語った。

李卓教授の「日本近現代社会史」については、北京外国語大学日本学研究センターの周維宏教授が章節ごとに詳しく講評した。同書は、第一章 社会構造に関する分析、第二章 家庭社会学、

第三章 女性社会学、第四章 労働社会学、第五章 人口社会学の五章からなり、全体の構成は完璧であり、社会史研究において積み重ねた研究成果としては右に出るものはないと評した。

武漢大学芸術学院の王傑泓教授は『中国図書評論』（2010年第8号）に、「現代化における東洋模式と中日間のドッキング——彭修銀教授の新作「中国近現代絵画史」を読んで」を発表した。それによると、彭修銀教授の「中国近現代絵画史」は民族芸術と外来芸術との融合を中心に、新進国が芸術文化においていかに自己超越と持続発展を実現するかについて論議し、同書は当代の中国にとって啓示性と予見性を持つと評した。

劉岳兵准教授の「日本近現代思想史」については、中国社会科学院の卞崇道教授が2010年8月14日に北京外国語大学日本学研究センターで同書のセミナーを主宰し（「日本近現代思想史に関する力作——劉岳兵の『日本近現代思想史』」として『或問』第19号2010年12月に掲載）、同書の開拓力及びその学術的価値を肯定した。

北京大学歴史学部の宋成有教授は臧佩紅准教授の「日本近現代教育史」について、日本近現代教育に散見する問題、特に教育と国家発展との関係及び日本における教育の地位を検討し、日本近現代教育の発展過程について段階的分析をし、客観的に日本教育の損得を見極めようとする点に作者の研究の潜在的可能性が見られるとした。

北京大学外国語学部の于榮勝教授は王健宜教授、呉艷准教授、劉偉准教授の共著である「日本近現代文学史」について、幕末から平成までの作家の文学世界とその時代を生き生きと再現、解説し、質・量ともに豊富な内容が盛り込まれており、単なる文学知識の羅列に終わらず、文学と社会、ひいては日本現代化との相互関係を深く探求し、文学が時代の流れに従って変貌する姿を的確に把握していると高く評価した。

首都師範大学歴史学部の史桂芳教授は宋志勇教授、田慶立副研究員の共著である「日本近現代対華関係史」は秀逸であると評価した。同書は日本の対華政策、日中関係を軸に、近代以降の対華政策制定の背景、実施の過程及び日本現代化の歷程における作用を探り、戦略的に戦前戦後の対華政策を位置づけた。と同時に内閣の交替による対華政策の差異及び中日関係に与えた影響を客観的に分析した。更に同書が長期間にわたって、形成されてきた誤解と理解の偏りを正したことは、理性的に近代以来の対華政策と中日関係を見る上で参考になると講評した。

シンポジウムでは、読者の日本現代化に対する関心などについて、出版界及び学術刊行物の編集者らが各自の意見を述べた。また王敏教授は本叢書の後続プロジェクトとして、和訳・英訳本が出れば、英語圏と日本語圏でも読まれると提案した。王教授は適切な時期に西洋、日本の学者の評論の対象になるだろうと言い、更に日本法政大学国際日本学研究所における月一回の勉強会で本叢書の各巻を検討すると述べた。

専門家と学者らは今後の日本現代化の研究と方法をめぐって意見を交わした。卞崇道教授は、本叢書は日本現代化の各側面から、学科別に歴史的研究が行われた成果であり、今後の特別研

究と総合的理論研究のための基礎固めをし、また日本現代化研究における世界的視点の重要性及び方法論における創新の意味を強調した。更に『日本現代化研究学術史』の整理と研究を通して日本現代化研究の学術体系を築くべきだと提案した。

楊棟梁教授は総括として、参加者の素晴らしい発言に感謝を述べ、今後も本領域の研究を強化する旨を語った。また最後に「日本は紆余曲折を経ながらも現代化の道を邁進し、新進国としての経験と教訓が常に並存していた。歴史の流れに沿って、日本現代化の損得を縦・横両方向から把握したうえで、分析するのは人の不心得を戒めるためであり、己を律するためでもある」と締めくくって、閉会を宣した。

今回のシンポジウムは本研究領域で活躍している著名な専門家と学者が一堂に会し、参加者が述べた洞察力溢れる見解は必ずや中国における日本現代化研究の更なる前進を実現させることだろう。

訳者：呉艷（南開大学日本語学部）

